

I 章 未来ビジョンの役割

～なぜ未来ビジョンが必要なのか～

現在の自由が丘がまちづくりの道標としてきた「コミュニティマート構想」の策定から30年超の時間が経過

- 1988（昭和63）年度に策定された『自由が丘商店街活性化モデル事業報告書（通称コミュニティマート構想）』（策定：自由が丘商店街振興組合）は、自由が丘の個性を高めていくことを目標として地元の商業者が中心となって作りあげた構想書です。
- 当構想では、街並み景観形成のルール作りや自由が丘文化を象徴するユニークでドラマチックな空間の必要性などが提唱され、その後、当構想に基づいてマリクレール通り、九品仏川緑道、サンセットアレイ、駅前広場など今日の自由が丘の魅力を支える環境が整備されました（右頁参照）。これらの整備にあたっては、目黒区による都市計画マスタープラン、都市再生整備計画、地区計画等が下支えとなってきています。
- 『コミュニティマート構想』については、実現できていない構想や積み残している課題もあるなかで、当構想の策定から既に30年以上が経過していることと、この間の社会経済情勢の変化を踏まえ、次代に向けたまちづくりの基本的な考え方を整理した『自由が丘駅周辺地区グランドデザイン』（2020年度）が都市再生推進法人(株)ジェイ・スピリットによって策定されたところです。

近年における急速な情報技術の革新や超高齢化社会の進行、地球環境問題の顕在化などまちを取り巻く情勢が激しく変化

- コミュニティマート構想の策定後、バブル経済（1986-1991年）の崩壊やリーマンショック（2008年）といった経済面での打撃や、阪神・淡路大震災（1995年）や東日本大震災（2011年）に代表される自然災害による社会面での混乱が起きる中でも、自由が丘のまちは地元の努力と行政の支援により、`選ばれるまち、としての地位を獲得・維持し続けています。
- 一方で、生活様式を大きく変化させている情報技術の急速な革新、人口減少と並行する高齢化の進行、あるいは地球環境への負荷拡大といった社会経済現象に対して、自由が丘全体として向き合うことが余儀なくされています。
- 2020年初頭に発生した新型コロナウイルスによるパンデミックの経験もまた、都市衛生という観点から生活・就業の場のあり方など次代のまちづくりを考える際の重要な教訓をもたらしています。

今後予想される社会経済情勢の急速な変化の中でも、自由が丘が自由が丘たりえる文化性を次代に継承・発展させていくことを目指して、まちづくりがひと回りする30年後を視野に、『自由が丘駅周辺地区グランドデザイン』をベースとした新たなまちづくりの道標として『自由が丘未来ビジョン』を策定します。

【コミュニティマート構想における基本方針】

【現状】

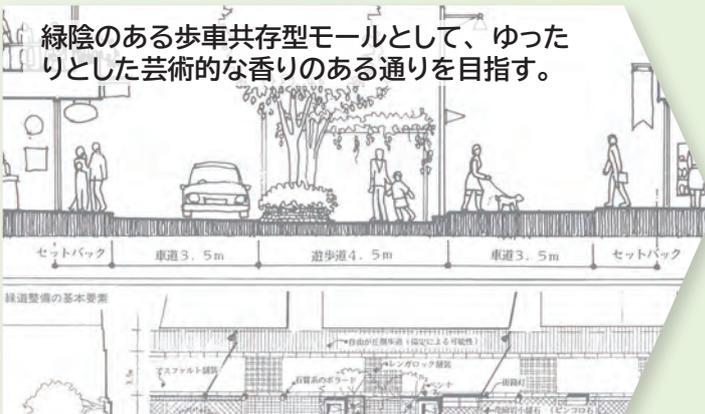
マリクレール通り

店の奥まで見える透明感のある外壁で構成される街並みを目指す。



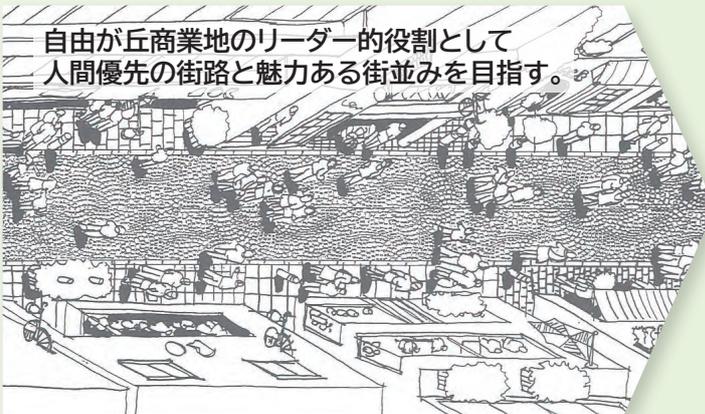
九品仏川緑道

緑陰のある歩車共存型モールとして、ゆったりとした芸術的な香りのある通りを目指す。



サンセットアレイ

自由が丘商業地のリーダー的役割として人間優先の街路と魅力ある街並みを目指す。



駅前広場

ヒトとクルマの面積配分を逆転させ、多目的利用のできる人のための広場を目指す。

